

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730533

研究課題名(和文)小中学生を対象とした問題解決スキル訓練の開発とその対人行動改善効果

研究課題名(英文)The effect of problem solving skills training on adolescents' interpersonal behaviors

研究代表者

高橋 史(TAKAHASHI, Fumito)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：80608026

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、仲間関係を改善させる効果がある対人行動を見せて体験させて教える社会的スキル訓練と、自ら考えて経験から学ぶ力をトレーニングする問題解決スキル訓練の、小学5年生の対人行動改善効果を比較した。

訓練前後の変化を分析したところ、社会的スキル訓練と問題解決スキル訓練のいずれも、「友だちにあたたかい言葉かける」などの向社会的行動の増加効果が認められ、その効果は約1年後まで維持されていた。一方、攻撃行動の減少効果については、社会的スキル訓練では訓練直後にのみ認められ、問題解決スキル訓練では訓練終了から約1年後まで効果が維持されていた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to compare the effect of social skills training (SST) and problem solving skills training (PSST) for 5th graders.

Results showed that both SST and PSST increased participants' prosocial behavior and that intervention effects were maintained at one-year follow-up period. The SST decreased participants' aggressive behavior immediately after the intervention but that effect disappeared at one-year follow-up. The PSST also decreased participants' aggressive behavior immediately after the intervention and that effect was maintained at one-year follow-up.

研究分野：認知行動療法

キーワード：攻撃行動 小中学生 問題解決スキル訓練 介入研究 長期的効果

1. 研究開始当初の背景

問題解決とは、問題場面での適切な対処法を導き出すための、個人の能動的な認知処理のことである。問題解決を改善する問題解決スキル訓練は、子どもの攻撃行動に対する有効な介入法であることが先行研究から確認されている (Eyberg et al., 2008)。しかしながら、わが国の教育現場において活用するにあたっては、解決すべき課題が2つある。

1点目として、認知発達が顕著な小中学生を対象とするにあたって、認知処理のトレーニングを行う問題解決スキル訓練を対象者の学年に合わせてどのように修正すべきかという点が明らかになっていない。問題解決と攻撃行動の関連の学年間相違は研究代表者らの調査報告によって示されたものの (Takahashi et al., 2009)、具体的な訓練法の提案にあたっては、実験的手法による再検証が必要不可欠である。

2点目として、わが国の小中学生を対象とした問題解決スキル訓練については、対人行動の改善効果を明示する実証的データが示されていない。研究代表者はこれまでの研究において、中学生を対象として問題解決スキル訓練を実施し、攻撃行動の減少効果を報告した (高橋他, 2010)。しかしながら、当該研究では統制群が設けられておらず、問題解決スキル訓練の効果を明示するには至っていない。

2. 研究の目的

このような学術的背景をふまえて、本研究では、わが国の小中学生を対象とした問題解決スキル訓練の対人行動改善効果を示すことで、子どもが自分自身で考える力を効果的に伸ばすための学年別の援助方法を提案する。

3. 研究の方法

研究1：対人行動の改善につながる問題解決要素の学年間比較

甲信越地方の公立小中学校に在籍する小学4年生、6年生、および中学2年生計139名を対象として、問題解決スキル訓練を実施した。訓練は、通常授業時間を用いて、小学生に対しては1回45分計4回、中学生に対しては1回50分計4回のセッションを設けて実施した。

介入前後には、子ども用社会的スキル尺度 (嶋田, 1997) を用いて、自己評定および教師評定による対人行動 (向社会的行動、攻撃行動、引っ込み思案行動) の測定を行った。また、研究代表者らが作成した対人ストレス場面のビデオ映像 (Takahashi et al., in reviewing) を用いて「問題の明確化と定式化」「解決策の案出」「解決策の評価」「解決策の実施と検証」という4つの問題解決要素を児童生徒に実行させることで、問題解決の測定を行った。

問題解決の測定では、研究に参加した児童

生徒には、最初に対人ストレス場面のビデオ映像を視聴させた。次に、ワークシートを用いて、「(ビデオ映像中の場面では) どのようなことが起きたか」という点の記入を求めた。記入内容は、評定の訓練を受けた大学生4名が0 (ビデオ内容と全く無関係で主観的である) ~ 4 (ビデオ内容が過不足なく客観的に記述されている) の5件法で評定し、4名の評定の平均値を「問題の明確化と定式化」得点として分析に使用した。

次に、ビデオ映像中の場面での解決策や対処法を思いつく限り記入させた。記入内容は、評定の訓練を受けた大学生2名が「向社会的」「攻撃的」「回避的」「その他」の4つに分類し、「解決策の案出」において案出された解決策の数としてそれぞれカウントした。分類の信頼性について検証するために評定者間一致率を算出したところ、 $r = .88$ と十分な値が示されたため、2名の評定者が異なる分類を行った場合にはいずれかをランダムに抽出することとした。

次に、ビデオ映像中の場面でとりうる向社会的解決策と攻撃的解決策を提示した上で、各解決策のメリットとデメリットを自由に記述させた。記述された向社会的解決策のメリットと攻撃的解決策のデメリットの数を合計したものは「向社会的評価」、向社会的解決策のデメリットと攻撃的解決策のメリットの数を合計したものは「攻撃的評価」と命名し、「解決策の評価」を示す得点としてそれぞれ分析に使用した。

最後に、ビデオ映像にて出演者が向社会的解決策と攻撃的解決策を実行している場面を視聴させ、各解決策のメリットとデメリットを再度記入させた。記入内容は、評定の訓練を受けた大学生4名が0 (ビデオ内容と全く無関係な変化をしているまたは関係ある変化をしていない) ~ 4 (ビデオ内容と関連した変化をしており無関係な変化はない) の5件法で評定し、4名の評定の平均値を「解決策の実施と検証」得点として分析に使用した。

上記の方法で得られたデータについて、訓練に伴う問題解決の変化量と対人行動の変化量を用いた相関分析を行った。

研究2：問題解決スキル訓練による対人行動改善効果の検討

甲信越地方の公立小学校に在籍する小学5年生計136名が研究に参加した。研究参加者は、学級ごとに、実験群、比較対照群、Waiting-list 群に割り当てられた。実験群は自ら考える力をトレーニングする問題解決スキル訓練、比較対照群は支援員が提示した適切な行動を練習する訓練に参加した。介入はいずれも、1回50分、計6回であり、介入期間は約2ヶ月であった。

介入前後には、研究1と同様の手法で、参加児童生徒の対人行動の測定を行った。Waiting-list 群は介入に参加せず、測定のみ

を行った（平成 26 年度に介入を実施した）。

研究 3：問題解決スキル訓練の効果の遅発性および持続性の検討

研究 2 に参加した甲信越地方の公立小学校に在籍する小学 5 年生（研究参加当初）計 136 名について、介入終了から約 6 ヶ月後および約 1 年後の時点で追跡調査を行った。調査内容は、研究 2 の介入効果評価内容と同様に、向社会的行動、攻撃行動、引っ込み思案行動について、質問紙による自己評価および教師評価を行った。

4. 研究成果

研究 1：対人行動の改善につながる問題解決要素の学年間比較

小学 4 年生では「問題の明確化と定式化」と「解決策の案出」が対人行動の改善につながる可能性が示された。また、小学 6 年生および中学 2 年生では「解決策の案出」と「解決策の評価」の向上が対人行動の改善につながっている可能性が示唆された。

「問題の明確化と定式化」および「解決策の実施と検証」と対人行動との関連については、一貫した結果が得られなかった。これらの問題解決要素は、対人行動の変化に直接影響するというよりも、「解決策の案出」や「解決策の評価」の変化を促すことで、対人行動の改善に間接的に寄与していると考えられる。

研究 2：問題解決スキル訓練による対人行動改善効果の検討

自己評価値においては、実験群と比較対照群の両方で、向社会的行動の増加、攻撃行動および引っ込み思案行動の減少が見られた。教師評価においては、実験では向社会的行動の増加、比較対照群では向社会的行動の増加と攻撃行動の減少が見られ、引っ込み思案行動は両群で変化が認められなかった。Waiting-list 群においては、自己評価による引っ込み思案行動の減少が見られ、その他の指標においては変化がなかった。

以上のように、問題解決スキル訓練は、介入を行わない Waiting-list 群と比べて有意な介入効果を示した。これは、本研究の仮説を支持する結果である。さらに、向社会的行動の増加効果が明らかになったという点は、問題解決スキル訓練による攻撃行動減少効果のみを示した研究代表者らのこれまでの研究をさらに前進させるものである。

研究 3：問題解決スキル訓練の効果の遅発性および持続性の検討

実験群では、自己評価における向社会的行動の増加効果と攻撃行動の減少効果が 6 ヶ月後および 1 年後にも維持されていた。引っ込み思案の減少効果は、6 ヶ月後および 1 年後まで維持されなかった。教師評価における向社会的行動の増加効果は、6 ヶ月後および

1 年後まで維持されていた。

比較対照群では、自己評価における向社会的行動の増加効果は維持されていたものの、攻撃行動および引っ込み思案行動の減少効果は維持されなかった。教師評価でも同様に、向社会的行動の増加効果は維持され、攻撃行動の減少効果は維持されなかった。

以上の結果を要約すると、問題解決スキル訓練の効果の遅発性は本研究においては認められなかった。一方、特に攻撃行動の減少という点において、効果の持続性が認められた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

武部匡也・田原太郎・福田繭子・高橋 史 (2015). 怒りの抑制に関するポジティブな信念と対処方法および社会的スキルの関連性 認知療法研究, 8, 116 -123. 査読あり

高橋 史・小関俊祐・小関真実 (2014). 児童に対する社会的スキル訓練による転校生受け入れに関する自己効力感向上効果 ストレス科学研究, 29, 77-83. 査読あり

武部匡也・田原太郎・福田繭子・高橋 史 (2014). 怒りの対処方法に関する臨床的問題と介入研究の動向 信州心理臨床紀要, 13, 75-88. 査読なし

高橋 史・嶋田洋徳 (2013). 小学生の認知発達に合わせた問題解決スキル訓練の有効性の検討 発達研究, 27, 31-38. 査読あり

小関俊祐・小関真実・高橋 史 (2012). 中学生の抑うつに及ぼす社会的スキルとソーシャルサポートの影響 - 質問紙による行動記録と自己評価の比較 - ストレス科学研究, 27, 32-39. 査読あり

〔学会発表〕(計 3 件)

— Takahashi, F. (2015). Individual Problem-Solving Skills Training for disruptive behavior problems in early adolescents with Autism Spectrum Disorder. Paper Presented at Banff International Conferences on Behavioural Science 2015, Banff. 2015 年 3 月 16 日発表

— Takahashi, F. (2013). Problem definition procedure enhances solution generation in people with

executive dysfunction: A pilot study.
Paper Presented at The 4th Asian
Cognitive Behavior Therapy Conference,
Tokyo. 2013年8月23日発表

- 高橋 史 (2012). 問題の明確化プロセスが解決策の案出数に及ぼす影響 - 怒り感情の強さによる影響の差異 - 日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集, 242-243. 京都 2012年9月22日発表

〔図書〕(計 1 件)

- 高橋 史(訳)(2013). 第9章 問題解決のやり方を教える(佐藤正二・佐藤容子 [監訳] 認知行動療法を活用した子どもの教室マネジメント - 社会性と自尊感情を高めるためのガイドブック 金剛出版, pp.187-213.)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 史 (TAKAHASHI Fumito)
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号：80608026